書 評

日本語学習者の読解過程に見られる特徴と指導への示唆

書評: 野田尚史編. 2020.『日本語学習者の読解過程（日本語教育学研究 8)』東京: ココ出版.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士前期課程
塚本大地

本書は、日本語教育学研究シリーズの一冊であり、様々な背景を持つ日本語学習者の読解過程に関して、その困難点や読む際の工夫、読みの指導で行われる多様な読解活動について考察を行った書籍である。本書の構成としては、複数の執筆者による論文集となっている。また、編者である野田尚史は、日本語学や日本語教育学を専門とする研究者である。

本書は、「この本の目的と構成」にはじまり、第 1 部から第 5 部、そして「あとがき」へと続く構成となっている。

「この本の目的と構成」では、本書の目的が、「聞く」「読む」等の理解活動に関する研究が少ない現状を踏まえ、日本語学習者が読解活動において頭の中で行っていることを明らかにすることにあると説明される。また、それぞれの部で扱うテーマについて解説した上で、読解研究で扱うべき研究課題とデータに基づく分析方法のあり方を示すことで今後の研究が盛んになり、読解教育で指導すべきことが明らかになることへの期待が述べられている。

第 1 部では、読解過程の研究方法と研究課題の設定のあり方について述べられている。読解研究では、理解活動である読解過程を容易に観察できないことや、データ収集にも多くの時間と労力がかかることが研究の難しさとして挙げられる。このため、研究方法としては学習者にある読み物を読み上げてもらい、その理解を母語によって語ってもらう方法が適切であると指摘している。また、研究課題については、読解能力の向上を目的とする場合、読解での困難点や推測等の動的な読解過程、辞書の活用や読解能力の発達をはじめとする読解過程の諸相、学習者間の協力等の多様な読解活動についての研究が必要であるとしている。

第 2 部では、読解の困難点に焦点をあて、非漢字系と漢字系、そして初級から上級といった学習者の言語的背景や日本語能力に応じて、読解においてどのような困難があるのかを分析している。困難点の例として、非漢字系上級学習者では漢字熟語の混同などの語句の意味や、語句のまとまりの把握などの文構造、文と文の関連づけなどの文脈理解等に困難があるとしている。また、漢字系上級学習者では、中国語の意味と異なる漢字語の理解など、漢字系学習者に特有の困難点も指摘されている。

第 3 部では、動的な読解過程について分析を行っている。非漢字系上級学習者は、語の意味決定において、自身の解釈や辞書での意味を検討しながら、修正や確認を行うことで、文脈の不整合に関する問題を解決していると述べている。その他に、理解できない部分があ

っても読み進め、筆者の主張を確認したところで文脈を振り返ることで文章全体での主張を理解したり、読解での失敗を防ぐためにある程度読んでから辞書を引くなどの工夫をしたりしていると分析している。また、漢字系中級者では、未知語について、その語を含む文に注目したり、問題がある場合には推測の対象を広げたりしながら対処していることや、漢字系上級者では多義的な語について文脈に合う様々な意味を検討した上で、一つの意味を選択しているなどの特徴が述べられている。

第 4 部では、読解過程の諸相として、辞書の使用と読解過程の縦断的研究をもとに学習者の読解の変化について述べられている。辞書使用では、非漢字系の学習者に関して、調べる単語を切り出すことや、辞書に載っている語義から文脈に合うものを選ぶこと等につまずきや困難があるとしている。縦断的研究では、非漢字系中級の学習者は、論文を読めるようになる中で、単語や表現から文構造の把握のための助詞や表現形式へと注目点が変化することなどが指摘されている。

第 5 部では、様々な読解活動について、一人で読むこととグループで読むことの関係性やピア・リーディングでのグループ・ディスカッションによる接続詞や文脈への理解の深まり、論文執筆を学ぶ際の読解活動について考察がなされている。一人で読むこととグループで読むことの関係性に関しては、グループで読むことで、一人で読んだ時に解決されなかった点が解決されたことや、ある学習者の質問に対して、他の学習者が質問をした学習者の状況に合わせた事例を引き出して答えたことなどを指摘している。グループ・ディスカッションに関しては、接続詞の存在の意識化、接続詞を前後の接続詞と関連付けた大局的な読みや文章構成の検討の習慣化等に効果があったと分析している。また、論文執筆のための読解活動では、モデル論文から表現を取り出し、自身の論文で使ったり表現リストを作成したりするなど、様々な方法法で分析的な読解を行っていたとしている。

「あとがき」では、本書の出版に至った経緯をはじめとして、編者と執筆者の今後の研究への抱負などが述べられている。

本書において重要であると考えられる点は、以下の二点である。

一つ目は、本書の冒頭で述べられているように、読解研究における研究課題とその研究方法を示し、それぞれの研究報告を通して研究事例を紹介した点である。日本における読解研究に関しては、英語教育でも同様に研究が盛んであり、学校教育をはじめとして様々な場面での読解に関する研究が行われている。しかし、主に日本語母語話者を対象とする英語教育とは異なり、日本語教育では学習者が持つ母文化や母語等の多様性を考慮する必要があるなど、日本語教育独自の特徴がある。このため、本書が日本語教育における読解研究での研究課題と研究方法を明確化し、それに基づく研究事例を示したことは、日本語教育分野における今後の読解研究の参考となり、大きな貢献であると言える。

二つ目は、読解の困難点や読解活動について、学習者の背景や活動の特徴を踏まえながら、読解指導での注意点や特定の指導による効果を明らかにした点である。現在、国内外を問わず日本語学習者の文化的背景や学習環境は多様であり、指導者はそれぞれの状況を踏まえながら個に応じた指導を行う必要がある。実際、音読では、茂住・足立(2003)が明らかにしているように、教師は学習者のレベルに応じて異なった音読活動を実施している可能性がある。このような現状において、漢字に関する知識の有無などの特徴ごとに困難点を明らかにしたことは、今後のカリキュラムや活動案の作成への示唆となり、より柔軟な指導への貢献という

点で意義があると考える。

一方で、困難点や指導効果に関する考察部分については、さらなる検討が必要であると考える。例として、舘岡洋子による、一人で読むこととグループで読むことの関係性についての論文では、ある学習者からの質問への解答にあたって、他の学習者が質問者の経験に合わせた例の提示をしたことや、双方向の意見交換によって、質問者以外のメンバーにも気づきがあったことに関して考察されているが、この点については調査によるデータをより多角的な視点で分析することで、より詳細な考察が可能であり、データが十分に活用されていないとの印象を受けた。このため、学習者の話し合いの内容や感想のみに注目するのではなく、学習者の性格や話し合いに臨む態度、話し合いでの役割などを考慮し、学びを深める要因についてもより詳細に分析を行う必要があったのではないかと考える。学びを深める要因を分析することで、今回の研究で明らかとなったグループでの読みの効果を踏まえながら、今後の読解指導について、より具体的な示唆が可能となると考える。

最後に、本書は学習者の読解過程の様々な側面について、具体的な研究事例を紹介しながら分析を行い、困難点や読解活動の効果について考察を行っている。本書の冒頭において読解研究における研究課題等について説明がなされた後に、それぞれの研究について述べられるため、研究領域の全体像を捉えやすく、これから読解研究を学ぶ読み手にとっても読みやすい一冊と言えるだろう。今後は、本書で指摘されている困難点や読解活動の効果を踏まえた指導方法の提案に期待したい。

茂住和世・足立尚子. 2003.「音読はクラス授業でどのように行われているか: 教師に対するアンケート調査から」『日本語教育方法研究会誌』10(1):2-3.